

光明 第五巻第九号

不退の向上 噫。中野千代香法姉

松は緑に墓標悲し

秋の陽朗かに晴れて、千草は紅に黄に咲き乱れ、田園ようやく色づいて、人の心何となうのどかに歌わねばならぬ今、私は花岡悲風、斉原一道両君と共に、君の墓前に合掌して、断腸の涙をしばらねばなりません。

かつて君が学びし小峠小学校の校庭の南端にそびゆる小山を、岩に手をかけて登れば、幾十の墓石冷たく眠れる中に、君の墓標新しく立つ。

この辺り、一帯に仙境。松の緑の間、断崖絶壁を望む。

静かに香をたき、華を捧げて合掌、三人口をそろえて読経すれば、松籟声に和して秋ひとしお悲し。

還り来らざるか君、もの言わざるか君、墓地に立つて望めば、君が育ちし中野家は眼下にあり。しかも今、君はいまさざるか。ああ、中野千代香法姉。涙と共に湧き出るままに、法姉生前の尊き念仏生活を讃えて、普く我が同胞の胸に送る。

花は散った

君は安佐郡小河内村中野源市の長女に生れ、小学校の成績も抜群でありました。ついで広島市安田高等女学校の第三学年に入学し、昨年の春、同校を卒業して、直ちに東都に上り、共立女子職業学校に入学許可せられ、今現に第二学年でありました。夏季休暇を了えて八月三十一日に東京に着かねばならなかった君は、心の内に根ざす二つの欲求、どうしても帰らねばならぬ義務と、魂の底から湧く帰ることの嫌さに雄々しく戦って、理性に克^{かち}を与えて三十日家郷を後に出てゆきました。ああ、これこそ永遠になつかしい御両親、故郷、全てと別れるの秋でした。

関東地方の大震災。君もまた死処をあの恐しい炎の内に求めねばならぬ運命でした。職業学校の倒壊、数百名の学生の即死を新聞紙の報道に見出した時、君の安否如何と、君の知人たちと心配した甲斐もなく、あわれ寄宿舎の二階の倒壊と共に君がいませし十七号の室、三人の白骨の内に千代香法姉のそれを見出さねばならなかった悲しい運命よ。

花もはじらう十八歳、惜しい、いとわし、十八歳の君は、安養浄土に召されて往きました。

生きんとして、死に突進する矛盾の自覚

千代香様

私はあなたに五周年大会の時、お目にあたりました。それが最初でしかも最後でした。

あなたは全ての文明文化の源泉であり、焦点である東京の地において、外面的な物質文明に眩惑せられることなく、魂の内なる声を育てて行きました。

あなたは尊い念仏の子であつたのです。何という嬉しい目覚めでございましたでしょうぞ。

ここには法師が生前、御父上に送られた手紙などがございます。そのどれもが、たとえばがき一本にすら、み仏のお慈悲を讃嘆しないものはありません。友に送ろうとして書いてそのままになつたはがきの内にすら、

「……私どもは生きんとしつつ死に突進しつつあるのでございました。私たちの身も心もたくし得るものは南無阿弥陀仏の六字のみでございますね。私たちはほんとうに幸福でございます。温い／＼光明の中に包まれているのでございますもの、この光明の中を忘れますまい。共によろこばせていただきましょう。」

生きんとしつつ死につき進む。

それは、生命を大事にする者、自分を本当に愛する者のどうしても知らねばならぬ悲しい地上の大矛盾でございます。生きたい。生きねばならぬ。その悲痛な生命の欲求の前に、徹底的な鉄扉を下して、一步も前進することをゆるさぬ大事实は死の当面であります。

生死、ああ生きねばならぬと孤々の声をあげた時、ふき出す一息は、死への第一歩ではありますまいか。

生きん生きんとして、吐き出す一息／＼が、墓場へ！ 墓場へ！ の進軍ラツパの声。

真面目なる者の一度は知らねばならぬこの地上の一大矛盾。

千代香法姉様、あなたはこの大矛盾の前に頭をうなだれて、解決の鍵を握ろうとしました。

雑誌「宝樹」の中にあつたあなたの感想文を掲げます。

「生きんとしつつ死に突進してあるのでございました。深く／＼この時を感じさせていただけます時、私の胸は苦しさと淋しさとにもだえているのでございます。ああ、いくら肉身の父と言ひ母と言え、どうしても打ち明ける事が出来ない。今じつと目を閉ぢて過ぎた行為をふりかえりますときに、ああ何という恐ろしい罪人でございますいましたでしょう。本当に罪のかたまりでございました。どうかお導き下さいませ。私はただ教えられたる如く、みちびかれたるまま信じさせていただけます。」

魂の内なる声に耳をかすことなく、一生、物や金や名利ばかりに奔走して死んでゆく人々には、信仰などのいろいろはありますがありません。

生きたい！

死を更に突破して、永遠に生かしたまうところに、み親の五劫永劫の魂胆があるのでございます。

生きんとしてしかも死に突進するこの大矛盾を解き得る鍵は、ただみ仏のみ手にのみ握られてあります。

一度この矛盾に泣いた者は、すぐにここに永遠の解決を与えたまうみ仏のお誓い、寿命無量、光明無量の廻向を信じさせていただけます。

若い人の群、ただ現実の華やかさに酔うて、死を美しい青春の霞のあなたに包んで、遙かにながめて、よそ事になっている人たちの足もとは、一步あやまれば千仞の谷底であります。

老人は過去に生きます。死に背を向けて、過ぎ来し過去をとり出してわずかに生きようとしています。

けれども、その背後はすぐに、死のおそろしい奈落であります。

死を考えない者。

それは如何なる人であろうとも安価なる生の盲目的、姑息的享樂者であります。

死を考えて、「私の胸は苦しさと淋しきとにもだえているのでございませぬ。」と泣かねばならなかつたあなたはすぐ、み仏のみ胸の内に、永劫の寿命を得て抱きとられた念仏の子でありました。

純なる魂

み仏様のお慈悲は、見て信ずるのでもなく、知つて信ずるのでもなく、考えて信ずるのでもなく、聞けるままを信ずるのであります。

よき人のおおせによつて、名号のありたけ、やるせない救いのみ声を聞いて信ずるのであります。

聞いたままを信じて、仰せに従うのであります。南無は帰命であります。発願廻向であります。仏様の仰せにおまかせするのであります。

悪びれた皮肉な小賢しい智慧を持たされた現代人は、仏を信ずることが出来ないほど、ほんとの智慧を見失つてしまいました。もともと東洋人は、仏のあるなしを議論せねばならぬほどの無智ではなかつたのです。

善知識は如何なるところにもあります。自分を謙虚に見つめることの出来るものには、すべてにみ仏の偉大を知らせてくれる説法にみちています。邪見なるものはみ仏を信ずることが出来ませぬ。傲慢なる者は自分の罪と死に繫縛されているあさましい機を信ずることが出来ませぬ。素直に教えにすがることが出来ませぬ。すかさずれてもという美しい素純な心根がどこにありませぬ。

「ただ教えられたる如く、みちびかれたるまま信じさせていただきます。」

とは何というめぐまれた純でございませぬ。ともすれば自力我慢自分が出て泣かねばならぬ私と思いくらべた時、尊い心がいたします。一切三宝のみ前にあなたの如く、無我に敬虔に立ち得る人は、恵まれた方であります。

千代香様はどんなに美しい純なお方であつたか。私はその友の方が御尊父にお送りになつた御手紙を見せていただきませぬ。

「私は千代香様の友でございませぬ。昨日漸くにして我校の寄宿舎を訪れ千代香様の安否を尋ねましたところ、悲しいことに千代香様にはお亡くなり遊ばしたと承わ

りました。ああ、千代香様がほんとうにお亡くなりなすつたのでしようか……幾度もくくり返しては夢とのみしか思われません。友の悲しみに増して、御両親様のお歎きは如何ばかりでございましょう。ああ、み仏様は早くも千代香様を召されました。残された幾何の人々はどこなにか痛ましい心にならねばなりません。どうして千代香様は早くも召されたか……只々涙してやみません。千代香様のあの麗しい霊は、何真にと探し求めねばならなくなりました。ああ、千代香様は本当にお亡くなり遊ばしたのでしようか。やさしい千代香様をどうしても思われます。

千代香様は常に多くの人より優れたお心をお持ちなされました。いつでも優しくどんな方にも親切にして上げられますので皆々から敬われておりました。いつもは静かに何かに憧がれておるような方でしたけれど、級のわからない方々のためになげかれてその人々のためにお心を用いられました。千代香様に間違いの心で語ります時は、殊にはきはきしたお言葉でお慰め下さったり、導いて下さったりいたされませんでした。そしていつもみ仏にすがって強く生きられるお方でございました故か、粗雑な私達級の者には見られぬつましやかなお心の持ち主でございました。静かにやさしき奥には立派な理性を持つておられましたので、私は級中での優れた人として信頼しておりました。

時々には仏教方面についての感想を承つたりいたしました。つまらない事を言つて人に嫌みを与えるような行いはちつともなく、千代香様の総てが清く印象されたのでございませぬ。

ああ、千代香様にはもうお会い出来なくなりました。冴えたる月の光が千代香様の霊ではないかと飽かずながめることとございませぬ。」(渋谷おりめ様のお手紙)

一読して涙します。何という清きでしようか。貴嬢の上には念仏によつて輝き出る人間性最上の血と涙が流れています。ただ念仏を知つた人は多い。さらに念仏を信じたと思つている人も多い。けれども念仏によつて生き、念仏によつて生かされた人はあまりに少ないのが淋しいとございませぬ。

人間がみ仏によつて生き、み仏によつて生かされ、更により深く、み仏のみ心を心として、向上してゆくことは、最上の人格を打ち立てる所以であります。

やさしく素直に教えの前にはすがることの出来たあなたは、又、やさしくみ仏によつて生きる本当の念仏の子でありました。

つき出される心

み仏のつきせぬ慈悲光に照されては、如何なる難治の極重悪人もこのままがこのままに救われています。このままがこのままに救われて大安心であります。微塵の疑いもございませぬ。けれどもみ仏の慈悲にくるまつた、しかし強い智慧光に照される時、あさましいこの機がいよいよ泣けるのであります。そして又大安心のままが、このままでじつとしてはいられないのです。どうかかせねばならないのです。与えられた隣人たちが、久遠劫来の迷いから覚めないでいるのを見ると、じつととしてはいられないのです。

貴嬢は、なつかしい故郷の御両親に送らるるどのお手紙にも必ず、み仏様のお慈悲を信じて下さいと書きました。

ある時の御手紙には

「南無阿弥陀仏

送る身も送らる身も南無阿弥陀仏

泣くも笑うも光明の中

私たちはこの光明の中を忘れてはなりません。ともすると私共は、この光明の中を忘れて来るのでございます。」

と書きました。「光明の中を忘れな」といううれしい言葉がどんなはがきにも見えています。

「おなつかしいお父様お母様、嬉しい送りもの恵まれました。本当に嬉しうございます。おのずから感謝の念がわいて参ります。一人で涙が流れ出ています。あ待ちにまつた『光明』！『光明』！『光明』！送りもの！感謝でないものはございません。」

永久の光明の中をおよろこび下さいませ。私も遠き異郷にて共によろこばせていただきます。」

まだ入団なさらない頃、お父様から『光明』が送りものと一緒に送られた時、あなたはかくもよろこんで下さったのでございますか。

今年のお正月にあなたは、長い／＼お手紙を御家の皆様あてに書きました。それを見た時ほんとうに泣いてしまいました。お正月だから長く書かせてくれとことわり、生死の一大問題についてこまごまと書いて、お父様、お母様、その外皆様に一々返事をくれと書いてありました。そして、小河内村の内状を書いて、これを解決つけるには、念仏を信じさすより外ないことを言っていました。

堂々たる有志でさえ、何人が村の将来を思い、解決の鍵をたづねているでしょうか。

そうして早く帰つて一人をでも導きたい、救いたい、との念願を見ました。(私はこの手紙を他の方に御用立てて、持つてかえつていませぬので全文をかかげることが出来ないのを遺憾に思います)

又ある時は、

「(前略)真心こもりしこの柿、このかきもち、ああありがたい。真実からめぐまれたこの柿、このかきもち、ほんとにきれいでございますね。赤青白ほんとに自然の美でございます。」

おお私は考えました。これらは『与えられたるだけの美をはなつて、偽りない』のでございます。

尊い柿の色、それは与えられたる美を偽りなくはなつて。

お父様お母様、静かに／＼私のたどり来た路を考えますに、まるで夢のようでございます。私たちは、静かに人の世の姿を見なければなりません。泣くべきは泣き、苦しむべきは苦しまなければならぬのでございました。

けれどもその悲しみの底、苦しみのどん底にこそ、深い愛の世界、仏の慈悲が恵まれていたのでございましょう。

ああ、お父様お母様、この大問題を解決いたしましょう。早く心の満足を得ましょう。

心のどん底の淋しみ、どうする事も出来ない心の淋しき、胸の悩み、ああ悲しめる人よ、お、悩める人よ、仏の救いはあなたの上に輝く。

この頃はお正月でございましょうね。お父様お母様、どうかよろこばせて戴きましよう。お正月が来ればどうして「おめでとう」と言うのでしょうか。私にはわかりません。迷える多くの人にはお目出度くないのが本当でしょうに。

お父様お母様、私は一人で満足は出来ません。あの多くの迷える男女を導かなくてはなりません。

お父様お母様、私たちは何事もするのではございませぬ。させていただきますの
でございます………。」

与えられた美を發揮する。柳は緑に花は紅に、それぞれに与えられた美を發揮する、それはもつと大きな考えに立つ時、宇宙一貫に流れる絶対、真理、の表われねばならぬ千波万波の色彩であります。人も亦、人間としての最上の花に咲かねばなりません。人間の小さいはからいをひきさいて、み仏によつて無我に生きることは、それが人間最上の色に咲くわけであります。

一度救いを知らせてもらったあなたは、自然のはからいによつて常行大悲に生きさせられる自信教人信の人でありました。救われた者の第一に気につくことは、与えられた人生行路の道連れが、久遠劫来の眠りからさめないで何の意義もなく生きている様の哀れにも気の毒なことであります。あなたのその心持ちはお父様お母様の上に、そして友達の上に働きかけました。

悲涙そのままを法悦の涙に

東都の灰燼の中にあなたの骨を拾つてかえつて来なされたお父様が、何故に気も狂わんばかりに歎かれないか。それはお父様に出会った者の誰もが持つ不審であります。人間の愛別離苦に出会った時、誰もが出す言葉は、「あきらめなさい。」の一語であります。けれどもあきらめようと思う下からあきらめられないのが人情の自然であります。

親鸞聖人様は『口伝抄』の中に、

「愛別離苦にあうて父母妻子の別離をかなしむとき、仏法をたもち念仏する機いう甲斐なくなげきかなしむことしかるべからずとて、かれをばざしめいさむること多分先達めきたるともがら、みなかくのごとし。この条聖道の諸宗を行学する機のおもひならはしにて、浄土真宗の機をしらざるものなり。」

とお教え下さいました。あきらめることも思いわけることも出来ないで、ただ悲嘆に暮れるのが人間性の本当でございませぬ。

御両親に出会った時、

「あれほど常に手紙に書いて送つても驚きをたてないので、私たちの濟度のために死んでくれたのです。導きたい／＼という願いをはたすために死を以つてしてくれたのです。」

千代香様が亡くなったことは御両親にとっては惜しいし、可愛い心は一ぱいでございましょう。

けれども、あなたの死は、御両親をして永劫の迷いから、永劫のさとりの大変化をおこさしめる無言の大説法でありました。

「人生はかくの如く無常なるぞ！」

身にかけて示し、しかもかくの如きの無常の世に、何故につきせぬ生命に目覚めな
いか。

あなたの一死は、御両親に目覚めを与えるにはあまりに十分でした。生前書き残された手紙の一言一句も、御両親の肺腑をえぐる活文字となつて、真に御両親の血と涙にとろけあつています。

あなたは死をもつて、あなたの念願と使命をはたしました。

「あきらめよ」と言つてあきらめられぬ涙は涙のままに、悲嘆から法悦に、涙はそのままだに、しかも変つた涙となつて来ます。はつきりと、御両親の御氣持と、祖聖の御戒めを味わせて頂きました。御安心遊ばせ。御両親は念仏の行者におなりなさいました。

「なぜ死んだかの悲嘆の涙から、涙のままに、よう死んで教えてくれたの感謝の涙に、そして更にあきらめぬままに、この悲しさをみ仏様のみ、共に泣いて下さるといふ法悦の涙にまで。ただじつと人間性に立脚して、み仏のこのままの救いを味わせて頂きました。」

この親あつてこの子

尊父源市氏が京都駅にあなたの骨を持つて着かれてから後の出来事です。日出新聞は、あなたとあなたのお父様のことについて美しい記事をかかげました。

避難民と言えば、それは哀れにも気の毒なる人たちであります。名古屋駅から以西それらの人は親切のありたけを受けました。悪い考えをおこす人はどんなことでも出来ません。源市氏は決して避難民の群に入つて胡麻化すような方ではなかつた。避難民でないことを申し出でて、乗車賃をあくまで支払わねばおかなかつた高潔は、駅長その他を「道徳地を払う今の世にもこの人あり」と感心させてしまいました。その外数々の出来事は、美しい記事となつて社会に送られました。

私は幾度も幾度も涙します。強い強い説法が深い深い世界に私をさそいます。

小さく千切つて、誰に見せようともなく書きつけられた詩、いい悪いをぬきにして、あなたの魂の赤裸々なる躍動であります。

「淋しい人よ 悲しい人よ

共に悲しみましょう。泣きましよう。

おゝそれこそ私の一ばん幸福かも知れません。

そうして泣いて／＼進みましよう。

あの光明を見出すまで。
おゝこの谷の流れの清けさよ。
まあなんて美しいことでしょう。
ああ私の心はどうしてこんなにならないでしょう。
この谷の流れの如くに、
教えて下さいその道を
みちびき下さい私を。

あら美しい月が表われました。

あの淋しい月が

私の一ばんすきな月が

おゝ淋しいお月様よ

そうして永久にいて下さい。

そうして泣かせて下さいませ。」

末世濁乱、人はソロバン取る功利の根性ばかりに動いて来ます。

人の目からは涙が枯れて、人の体からは血の色が失せて、灰色の殺風景に荒んで来
ました。

谷のささやきと共に歌い得る人、月と共に泣き得る人、更に人と共に泣き得る人は
少くなりました。

涙の泉、人生浄化の涙の源、それは、み仏様のみ胸のつきせぬ悲涙に見出すより外
ありません。

あなたの全ては私たちの百万力であります。心は温ります。又しても涙は流れま
す。立たねばならぬと血はおどります。

閑人

戦懐

静かなる村里を自動車は平和に走る。

車中一人の紳士は読書に余念がない。

自動車はやがて川辺の断崖の上に出た。

突然、自動車は数丈の絶壁から落ちた。

紳士は自動車の下敷になって頭は碎けてしまった。

この話を聞いた時、私は戦慄した。刻々、死地に！

静かなる村里を走っている時、今一分したら、五十秒、三十秒、十秒、五秒、三秒、

二秒、それでもまだ死地を知らない。

ああ、人間の誰もがこの刻一刻の死地を知らない。

閑人がそれでもまだ議論に日を暮す。

易往無人

都会から雑多な嫌な響が聞えて来る。

汽車、工場、電車、自動車、汽笛……………

雑多な音がこみあつて私の神経をいらだたせる。

恐しい火炎が吹きつけるように、三毒の業火がああ音になつて響くのだ。

朝の空気は、呪い、憎しみ、愛、罵り、虚偽、戦い、貪欲……………

それらから出る毒気によつて濁るのだ。

一人一時間の瞋恚によつて、八十人の人を殺すに足る毒気を肺からはいているのだ。

ひし／＼と罪の意識が胸板をつく。

朝の時間は容赦なく流れ去る。

一年前、あの林の中に、日曜の午後を一人懐しい本を持って、コソ／＼と入つて行つた頃が思われる。

大地の沈黙。たたけど、打てど、冷たく沈黙せる大地。

あの沈黙がもう一度聞きたい。

一秒の隙なく胸にせまる、孤独の実感がもう一度ほしい。

秋は来た。私の胸には末世濁乱の罪意識と、地獄と極楽がなくてもすむ閑人の意味なき可憐な騒々しさを、涙ぐみたい心で一ぱいである。

永劫の眠りから永劫の覚りへ。

それは少いのがあたりまえだ。

ひしひしと身の幸福と、地上の悲しさが涙となる。

月は高し大地は暗し

暗黒の世界に月は晴れたり。地震はやみぬ。

月は高し、これこそ我が心の風光。

月下の大地は暗し、戦いは続く。

白刃をふるつて胸と胸をさしちがえる音は猶つゞく。

合掌して真如の月を拝めば、心は清し、気は澄みぬ。

友よ何時まで、久遠の昔から永劫の彼方に続く地上にのみ、心を奪われたまうぞ。

目をあげたまえ、心の内に高く澄める光に合掌まします。

大地は暗し、罪は深し。

月は高し。救いは金剛のみ胸に定まる。

すすり泣きつゝ合掌すれば、月は澄んでいよく高く、月下の大地に万犬吼ゆ。

ある地の講演の時であつた。

私は罪のおそろしさに涙しつゝ「地獄ゆきと泣け！ 罪に泣きましよう」と火を吹くように叫んだ。

若い人の魂はゆりおこされた。講演のすんだあと、罪におののく人たちが皆泣きつゝ救いを求めた。バタバタ如来のお慈悲に蘇える者の念仏で、どの室も埋められた。ところがある人から「如来のお慈悲は地獄行きと泣かねば知らしてはもらえないのですか」との奇問が出たそうだ。何というはからいだろう。「泣くにあらず、泣かざるにあらず、不可称、不可思議、不可説の信樂なり。」と言いたい。

閑はない。泣かねばとか、泣かないでもとか、そんなはからいが何で如来の前にゆるされようぞ。

暗黒の中にのみ欲しいものは光である。罪に泣く者にのみ欲しいのは救いである。

「悲哉」の二文字を、御本典の中から除いた時、親鸞様のあの血と涙にうるんだ尊い人格がどこにあらう。

温められる世界

兄「お前の眼は十日の間にそんなに荒さんだのか。その微笑と涙との中に光る狼のような目の光。」

妹「兄様、世の中は不真面目に渡る者だけが通れる世界です。」

兄「何故そんなに荒んだことを言うのか。」

妹「どんな男性をも信じませぬ。狼のような貪婪な牙を私にむけるのです。信じて崇拜していた方までがそうなのです。ずるく渡るのです。ずるく渡ればいいのです。」

兄「何故にそんなに荒むのだ。全ての者がずるいということが、お前にずるく行けということではない。お前は魂を殺そうとしているのだ。」

妹「私の周囲の者は、私がいかに荒さんでいるのをよろこぶのです。強くなつたというのです。強くなります。涙一滴おとさぬ女になります。」

兄「念仏はどうした。南無阿弥陀仏。」

妹「ああ！ 兄様の眼を見ていると、心の中の固い山が崩れて来ます。やはり弱いのか。」

兄「眼の中に、人間の血の色が見えて来た。涙も、清い泉から出る涙。」

妹「清さにかえさせられることは苦しいことです。荒んだままに生きたかつたのです。」

兄「清く生きねばの念願の源は、如来五劫永劫の血潮なのだ。尊いことだ。煩惱ばかりの冷風に吹きさらされている時、人はともすれば、その願を忘れる。」

妹「人は皆、真実ではないのですか。」

兄「人は煩惱に狂わされて真実を失うのだ。」

妹「兄様もそうなのですか。」

兄「私ももちろんそうなのだ。虚偽のかたまりなのだ。」

妹「ああ兄様も！ うれしい。うれしい。兄様ですか。ああうれしい。私もやはり、生きります。み仏に生ききらせて頂きます。」

兄「お前の眼は輝く。嬉しいことだ。」

妹「清められるために、私はやはり兄様にお会いしなければなりません。『私も虚偽のかたまりだ』との御一言がすっかり私を生かしてしまいました。人間は立つては起つては真実一道に進まねばならぬのですね。虚偽なることに泣きつつ。」

兄「虚偽なる者に、真実一道をにらんで不退に向上せしめたまう力が、如来の願力である。悪きこのままを、このままを腰かけず、如来の方よりこのままをこのままに救いたまう慈悲と智慧とに、慰められ励まされて、救いたまうことに大安ししつつも、虚偽の自分に泣きつつ、真実の一道に進まねばならぬ。」

妹「罵られ、叱られ、馬鹿められ、裁かれる世界では人の魂は荒んで涙は枯れてしまいます。赦され、救われ、慰められ、温められる世界で、人の魂は清く励まされ、真実への一道に立たされます。私の魂はひきしまりました。一分の隙もございませぬ。」

人格の基調

こんなお手紙を独りで読むにはあまりに尊い。龍谷大学（もとの仏教大学）に学ばせられる「法兄様がよこして下さった至誠の結晶、涙の内に拝読しました。」

「今は夜の一時でございませぬ。三十分ばかり前に一度寢床に入りました。するとすぐ天井に見たこともない先生のお顔が大きく現れました。そしてそのまわりにいるんなことが、それからそれと現れてまいりました。私はどうしても寝つかれません。一時を打つとうんと飛び起きてスイッチをひねりました。眼はいよいよ冴えて来ます。机に向つてこの手紙を書き始めました。ぶつきらぼうに変なことを書いてすみません。私は興奮しています。お許し下さい。しばらく頭の静まりますまで静座をやりませぬ（…五分…）再び筆をとります。」

先生、私は今日むやみに先生の名を呼びたくなつて来るのです。授業中でも、勉強中でも、又、たつた今、寢床にいました間でも、何げなく「先生！」と言いかけては口をつむります。今日の正午からこつちというものは私の頭は先生のことではございませぬ。又分らないことを並べかけましたが、私は今日昼食の時間下宿へ帰つて見ましたら、ある光明団員から封書が来ていました。それには急信と書いてありましたので、何のことだろうといぶかりながら開いて読みましたら、私は悲しくなつて泣いてしまいました。本当を言いますと、私自身の霊の引綱としていた綱が腐つてぶつたりと切れてしまったように感じました。私はもう何もする勇氣が出ませんでした。午後の学校も休んでしまおうかときえ思つたのですが、それだけはやめてフラフラッと学校に出ました。二時間ほど学校で何をしたんだか分かりませんでした。先生のことを考えていたことだけは確かでございます。

学校から帰るとすぐその方への返信を書き始めました。実はその方も自分の進退について大いに悩んで私に相談をもちかけて来られたのでした。その大意は、『近頃私の方では先生の評判が大変悪い。退団する者が続々出て来る。その中には主だった者が大分ある。団のためには致命傷になるかも知れない。評判の真否を確かめる

べく前原様を訪うた。そして確かでないとの前提のもとに二三のお話を聞いた。』というようなことでもございました。

私は返信を書き始めましたが私にも実際分りませんでした。『私どもは少くとも私だけは人によつて動かされてはならぬ。静かに理智の判断に待たねばならぬ』と変なことを書き入れたようでもあります。私はこれを書き上げると封筒に入れました。それを出さない内に昨年来の光明誌を引き出して貪るように読んで行きました。

『信なくしては人は生きて行かれない。人と人をつなぐ力はただこれ信である。』
『一目見て懐しい人、底光りのする人、温い人、それはきつとその裏に苦しい人間苦の杯を持った人である。』

『たゞきつければ飛上るゴム毯のように、人間苦が増せば増すだけとび出して来る歡喜の泉』

信、人間苦、歡喜の泉というような言葉がだんだんと私の頭を冷静にさせてゆきます。そして最後に『人間性に立脚して』のお言葉を読ませていただきました。これは今年の二月私が最も感銘して読んだなつかしい文字でもございました。しかるに今の私は、これを読み終えますと、すぐさま日記帳を開いてぞろぞろと次のようなことを書いていました。

「今私と先生とが互に反対の方向へ行き出したことを知った。古い光明誌を出して読んでいる中に今年一月号の『人間性に立脚して』の断片が目にあつた。これこそその当時たいそう私の心をついた大文字なのでもう一度くり返して読んだ。ところがたつたこの間まで私は先生と同じ（少くとも方向だけは）経路をたどつて来たが、この間の晩『論語』を味つて、これを愛読書の一つに数えることにしてから、私は先生と全然方角を変えてしまった。だがやっぱり先生の叫びはなつかしい。私は度々先生をふり返つて見はぐれないようにしながら私の方向へ進んで行く。」

と日誌へ書きつけていました。それが十一時でした。そして寝ようと思いましたが、数学の宿題を怠つていたことに気付いて、大急ぎでそれをかたづけしてしまったのが十二時半。それから又悩み始めたのでございました。私は先生への手紙を出さないではいられなくなりましたので、いきなり床から飛び出て筆をとつたのでございます。

先生、私は今日の日記へ大層あぶなそうなことを書いていましたが、今考えて見れば又どうしてあんなことを書きつけたんだらうと怪しまざるを得ません。これを書きながら又さつきの光明誌を開きました。『人間性』の一番終りに見残したところが新しく眼にうつりました。

『私はよそ行きの装いで人様に拝まれようとは思いません。どこまでも人間性の淋しさを共に泣いてほしいと思います。私には来る年毎に人の世の涙の世界が知られて来ます。私が若い時考えていた世界は、もつと清いけれど単調な机上の空論的なものでした。』

私は涙の世界を通り越して冷い理智の世界へ入りかけていたのでした。それがこの御言葉によつてグイと引きもどされるような感じがいたします。涙の世界にも理智はある。だが私の入りかけていた理智は涙なき理智であつた。私は常に言う、信仰

を生む理智は冷たいが、信仰の生む理智は温いと、私はそう言いながら信仰を生む理智に安住していたのでした。

ほんとに長いことを書いて来ました。もう二時を大分過ぎています。それにちつとも眠くありません。この後、如何な誘惑が来ようともわたしは決して光明団を離れません。先生を離れません。涙の世界の逍遙に歩調を共にさせていただきます。合掌（九月二十九日朝二時半）」

何という徹底でございましょう。こうした真摯な法兄様（未だお会いせぬ）のあることの有難さに涙します。

私たちは人格を高く築きあげねばなりません。人格の向上について少くとも二つの重要な事項を忘れてはなりません。

第一。五貫目の荷物しか負うことの出来ぬ者が、十貫目を負わんとしても駄目である。宗教は特に真宗の信仰は、一言一行といえども、如来大悲の前に偽ることをゆるしませぬ。徹底的に自分の真価を知らしめます。人格の建設の根本は、自分の偽ることなき実際の上に立つて、そこから始めねばなりません。

第二。人格の基調は涙でなくてはなりません。宗教的体験によつて自己の業苦に悩む涙を、そのままに我が隣人の上に移して行きます。信仰のない人は涙のうるおいがありません。どんな人とでも共に泣いてゆく。そこに本当の人類愛の誕生があります。人格はただ愛すること愛せられることによつて成長します。人格の根底は涙であります。

昔より偉大なる人格者はことごとく皆、愛の実行者でありました。

私たちは不退に向上せねばなりません。しかもその出発点を、如来の慈光に照し出された偽ることなき自分のありのままの上に求めねばなりません。自然主義は人間の醜さを赤裸々にさばき出してそのままにしておきます。念仏生活は醜いそのままにとどまることなく、そこを出発に本当の人間道に生きることを教えます。

法兄の涙にあふれた御言葉、法兄のいわゆる信仰の生む温い理智に根ざした御思索の道程、互に合掌して謙虚に涙の世界で手を取ろうとして下さる尊き人格が、私に大きな感謝と力とを与えて下さいます。はつきりと如来大悲に金剛の安心を得ながら不退の一道を精進させて下さる如来の大神に生ききりましょう。

生きる魂に一分の隙も閉ありません。